

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720016

研究課題名（和文） 従軍チャプレンと軍隊における宗教の研究

研究課題名（英文） Military Chaplain and Religion in the Military

研究代表者

石川 明人（ISHIKAWA AKITO）

北海道大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：90360875

研究成果の概要：

本研究では、「宗教」と「戦争・軍隊」とのかかわりを実証的レベルと思想的レベルの二面から扱った。一つは、アメリカ軍に専属の聖職者である従軍チャプレン（いわゆる従軍牧師）の歴史、位置づけ、任務内容について、主に軍内部の資料を用いて分析した。もう一つは、旧日本軍におけるキリスト教徒の特攻隊員および戦後キリスト教徒になった元特攻隊員の宗教的死生観や宗教的平和論について、彼らが書き残した日記、書簡、エッセー等を通して考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：宗教学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教、戦争、軍隊、キリスト教、アメリカ軍、日本軍、特攻、平和

1. 研究開始当初の背景

「宗教」というものは、基本的には愛と平和を唱えるものである。少なくともそれを建前とする。だが同時に宗教は、「戦争」や「軍隊」と積極的な関わりをもってきたのも事実である。宗教的平和運動がある一方で、宗教的な戦争の正当化や宗教的テロもあり、両者の関係は実に複雑である。「従軍チャプレン」（従軍牧師・従軍司祭）はそのような「宗教」と「戦争」の複雑な関係を示す典型的な事例だといえる。しかし従軍チャプレンについて

は以前から一応は知られているものの、彼らの歴史や実態についてはまだ十分に整理がなされていない。したがってここではまず日本とも関係の深いアメリカ軍を例に、従軍チャプレンとその制度全体について分析することを課題とした。

軍隊に聖職者がいるというのは、何か矛盾したことであるようにも見えるが、両者の密接な関係そのものは、人類史においてかなり古くから見られる。アメリカ軍のチャプレンという具体的事例の研究は、「宗教」と「戦争」の複雑な関係を考察していく手段として

だけでなく、アメリカの宗教・軍事、およびアメリカ文化それ自体を考察する新たな切り口にもなる。また、「従軍チャプレン」が伝統的宗教と軍隊との関係を扱う主題であるとすると、「軍葬」という伝統的宗教とは異なる広義の宗教的営みに注目して軍事組織（アメリカ軍）を考察することも、宗教学的見地からの軍事・戦争に関する研究の方法として有効であると考えた。

本研究の問題意識においては、以上のような実証的研究と共に、思想的な考察も重要である。思想的な角度から、あるいは人間個人のレベルから「宗教」と「戦争」の関係について考えるための方法として、ここでは日本兵の特攻体験と彼らの宗教的生死観、宗教的平和論に注目することにした。「特攻」は、人類の戦史全体においても大変特殊なものであるが、日本では必ずしもそれに関する十分な学術的研究がなされていない。戦場で極限状況におかれた若い兵士は、自らの信仰を背景にその定められた死をどう見つめたのだろうか。それを知るために、日記や書簡、あるいはエッセーなど彼らの書き残したものを分析していくことは、「宗教」と「戦争」に関する問題を考察していくうえでも欠かせない作業であると考えた。

このように大きく二つの角度から、「宗教」と「戦争・軍隊」との関わりを考察していくことによって、究極的にはわれわれが「平和」を考えていく際の新しい糸口を見出していきたいというのが、本研究開始当初の基本的背景および動機である。

2. 研究の目的

「宗教」と「戦争・軍事」は、良くも悪くも人類に普遍的ともいえる営みである。本研究はそれら両者の交錯部分に注目して、その関わりの様子を分析していくことを課題とするものである。特に宗教学の立場から「戦争」という出来事、あるいは「軍隊」という組織や兵士個々人についてみていくことで、これまで十分に知られてこなかった事実関係を明らかにしていくとともに、「宗教論」「戦争論」あるいは「平和論」といった幅広い領域に対して、新たな議論のきっかけを示していくことを究極的な目的としている。

アメリカ軍チャプレン制度について歴史的事実や現状を整理する作業は、そもそもこれまでほとんどなされていない。そこでアメリカの宗教史と戦史の双方に目を配りながら、またアメリカ軍の内部資料を豊富に用いることで、チャプレン制度史や軍における位置づけや理念を明らかにすることが具体的な目的となるが、扱うテーマの性質から、宗教史だけでなく、戦史や軍事史、アメリカ研

究なども視野に入れた学際的な貢献をすることも目指している。

また宗教と戦争・軍隊の関係は同時に戦争にかかわる一人ひとりの実存的な問題でもあるため、組織や制度だけでなく個人のレベルに目を向けることも重要となる。日本軍内で「特攻」という極限状態におかれた一兵士が、宗教的信仰から自らの死や戦争についてどう思索したかは、特定の歴史的場面の問題としてのみならず、信仰と戦争をめぐる人間に普遍的な問いでもある。日本現代史の一側面であると同時に、人間に根本的な実存的思索の問題でもあるという点で、ここでも宗教学という枠組みを超えた問題提起へつながっていくことを目指している。

3. 研究の方法

本研究は文献資料の分析を中心にすすめたが、同時に数回の出張による実地調査、資料収集、写真撮影などもおこなった。

従軍チャプレンおよびアメリカ軍における広義の宗教性に関しては、主にアメリカ軍内部で発行されている資料、具体的には陸軍の「フィールド・マニュアル」や「軍隊規則」、また海軍や国防総省から出されている指令文書などを扱った。また陸海空軍の公式ホームページにもチャプレン制度やチャプレン訓練学校の情報が詳しく掲載されており、有効な情報源として利用した。特に植民地時代から現代にいたるアメリカ軍チャプレン制度の歴史については、市販されている書籍や学術論文よりも、米陸軍チャプレン・スクールのウェブサイトに掲載されているチャプレン自身のレポートの方がはるかに詳細である。軍人のための教科書群である「フィールド・マニュアル」の多くもウェブサイトからダウンロードできるようになっており、チャプレン向けの教科書である「宗教サポート」という巻の最新版（FM1-05）や、軍の聖職者チームの活動内容を整理した「宗教サポートハンドブック」（TC1-05）も容易に入手することができる。それらはいずれも約200頁の冊子であり、今後も詳細に分析を必要のある重要な資料である。

2007年夏にはワシントン D.C からアーリントン墓地や海軍工廠などへ行き、現地の様子を調査して資料を集めると共に写真も多く撮影した。アーリントン墓地の無名戦士の墓の前で365日24時間続けられている衛兵交代の儀式や、チャプレン・ヒルと呼ばれるチャプレンの墓石が並ぶ地帯を見学し、また海軍工廠のチャペルやその他ワシントン D.C 周辺の戦争記念碑等を見てまわった。それらいずれにおいてもパンフレット等を多く収集し、かなり多くの写真撮影もおこなって、

学会発表や研究会報告などで活用した。

同年にはドイツ、ベルリンにも行き、ドイツ軍の「カトリック従軍司祭会館」に泊した。その建物のひとつのフロアは資料館となっており、ドイツ軍の従軍チャプレンに関する衣服、道具、写真などが多く整理・展示されていた。その一連の資料を管理している研究者モニカ・ジューダーホフ氏から詳細な解説もしていただき、質問もさせていただいた。また、ドイツ軍社会学研究所が世界の従軍チャプレン事情についてかつて調査をしたことがあることを知り、連絡をして問い合わせたところ、「軍事組織のなかの宗教」と題された約360頁にわたる国際的な従軍チャプレン制度比較研究のレポートを郵送していただいた。今後はこの資料の分析も重要な課題の一つである。

一般に入手可能な従軍チャプレン関連研究の著作も多く集めた。歴史学者や社会学者によるチャプレン制度に関する研究、またチャプレン経験者本人による従軍体験記の類、またアメリカ軍の組織それ自体や、アメリカ宗教史に関する本も集め、軍事と宗教との交差点にあたるこの従軍チャプレンという存在・制度についてトータルな分析ができるようにした。

旧日本軍の特攻隊員の手記に関する研究も、基本的には文献資料の分析という作業を中心にすすめた。まず一人目に扱った林市造の遺書や日記については、それが掲載されている本を入手し、その内容を詳細に読解していくことが最も重要な作業となった。また同時に、いわゆる神風特攻隊というものがどのような経緯で実施・遂行されたのかという歴史的事実について、多くの文献をあたって情報を整理していった。「特攻」という言葉それ自体はよく知られているが、しかし多くの資料に目を通していくと、これは必ずしも明確な概念ではないことがわかってきた。ひと言に「特攻」といってもそこには様々な形態があったし、また最終的な特攻による戦死者数というのも、数え方によってかなりの幅がでるものであり、結局「特攻」の概念とその歴史に関してだけでも大きな研究テーマとなりうるということが判明した。よって論文ではその点をあまり詳細に掘り下げることはせず、林市造がかかわった第二七生隊に関する事柄だけを整理するにとどめた。

林は鹿児島県の鹿屋から出撃したが、現在、鹿屋には海上自衛隊の基地があり、その敷地内に大きな資料館がたてられている。そこで2006年の夏にそこへ行き、林を含む特攻隊に関する資料を調査し、資料館の方のご好意により、倉庫へ保管されていた遺書に関する資料を見せていただくことができた。また館の担当者が林市造氏の家族と連絡をとってくださり、電話でお話もさせていただいた。

吉田満の戦争観・平和論等に関する研究は、もっぱら文献をとおしておこなった。具体的には『吉田満著作集』(上・下)の全てを詳細に読解していくことにより、『戦艦大和ノ最期』と執筆前後の状況や、カトリック入信のプロセス、そしてプロテスタントへの改宗の理由、戦争体験・特攻体験の追想、そして「死」をどう捉えたかなど、吉田満のライフヒストリーと思索の内容の両面を細かく整理・分析していった。

また他の多くの戦没者の遺稿やその他の資料を参照するために、また宗教と戦争との交差点のひとつとして、靖国神社とその中にある遊就館、偕行文庫にも足を運び、資料の収集や閲覧をして一連の分析・考察の助けとした。

4. 研究成果

この研究によって、アメリカ軍の従軍チャプレン制度の歴史・実態・理念などについて、その概ねを整理することができた。小説や映画などにもしばしば登場するいわゆる「従軍牧師」という存在について、彼らはどのように誕生し、どのような任務を担当し、軍においてはどう位置づけられているのか等について、日本ではおそらく本研究によってはじめて明らかにされた。

アメリカでは、17世紀初頭にジェイムズタウンが設立されたばかりのころから、聖職者は民兵たちによる戦闘に付き添っていた。正式にチャプレン制度がおかれたのは1775年の大陸会議の決定によるもので、この日が「米軍チャプレン制度の誕生日」とされている。植民地時代から南北戦争の頃までは、チャプレンも他の民兵たちと共に武器を持って戦うことも珍しくなかった。だが19世紀末には、従軍チャプレンは明確に「非戦闘員」と規定されるようになり、現在ではチャプレンによる武器の携帯・運搬・使用は一切禁止されている。

現在の「陸軍規則」(Army Regulation 165-1)によれば、従軍チャプレンの活動は、憲法修正第一条の「信教の自由」の権利を軍の内部においても保障するためになされる、とされている。従軍チャプレンの活動内容を解説した「野戦教範」(Field Manual: 1-05)でもそれとまったく同様の説明がなされている。この場合の「軍の内部」というのは、将兵はもちろん、国防関連の仕事に従事しているシビリアン、さらには兵士の家族も含まれ、彼らも全く同等のレベルで軍の「宗教サポート」の対象とされている。チャプレンの主な任務は、日々の礼拝や傷病兵の見舞い、洗礼式や死者の埋葬、カウンセリングなどである。またチャプレンは、軍の中で「宗教上

のリーダー」であると同時に、また「一人の将校」でもある。宗教上のさまざまなニーズにこたえるのはもちろんだが、同時に担当する部隊の兵士の士気を維持する役割や、兵士たちの道德面に関しても監督者的な役割を担う。つまり宗教・士気・道德という3つを総合的にカバーすることが求められているのである。また、自らの教派や宗教だけでなく、他宗教に関してもある程度の知識を持っていることが必要とされている。従軍チャプレンは部隊の軍事行動や作戦が、現地の宗教文化にどのような影響を与えうかなどについて、指揮官にアドバイスをすることも仕事のひとつだとされているからである。

18世紀や19世紀の従軍チャプレンは、宗教的役割だけでなく、兵士たちの識字教育や地理・歴史・倫理学などの教員もつとめた。また兵士たちの郵便や現金の管理などをすることもあった。現在では宗教上の仕事だけに集中せねばならないことになっているが、しかし例えばベトナム戦争中は、軍隊内の薬物蔓延が問題にもなったので、それに対応するためのプログラムなども組まれた。また将兵の国際結婚に関するアドバイスやカウンセリング、また戦時に長期間家族と離ればなれになった兵士が任務を終えて久々に家族と再会してから、すみやかに元のような妻、夫あるいは子供たちとの関係を再構築できるよう支援するプログラムもある。

チャプレンの補助の役割を担うものとして、「チャプレンアシスタント」がいる。チャプレンアシスタントがチャプレンと最も大きく異なるのは、アシスタントは聖職者ではないということと、あくまで戦闘員だという点である。彼らは下士官の中から選ばれ、チャプレンの宗教サポート活動の助手をつとめ、また戦場でチャプレンたちの安全を確保するための特別な訓練を受ける。チャプレンアシスタントの制度が始まったのは1909年であり、現在ではチャプレンと同じ訓練施設でアシスタント用の訓練コースも用意されている。

現在はサウスカロライナのフォートジャクソンに陸軍チャプレン学校がおかれている。そこでは要員の育成とともに軍における適切な宗教サポートの内容に関する研究がなされている。この学校の訓練で中心となるのは、チャプレン・オフィサー・ベーシック・コース(CHOBC)という課程で、これは従軍チャプレンとしての仕事を約12週間かけて学ぶコースである。すでにそれぞれの教派や宗教から聖職者としての資格を得ているものがこれに参加し、このコースを修了したら、大隊レベルの部隊のチャプレンになるか、あるいは予備役や州軍のチャプレンなどになる。

宗教サポート活動は、基本的にはチャプレン

とチャプレンアシスタントがそれぞれ最低でも1名ずつの組をつくって遂行される。この組をUMT(Unit Ministry Team)と呼び、全ての任務・活動はこのUMTを基本単位として構想されている。「野戦教範」によれば、UMTは「軍事作戦の混沌と不確かさのただ中で〔兵士たちに〕神の顕現を思い起こさせるもの」(Field Manual 1-05, 1-30)だとされている。

チャプレンの聖職者としての権威は、軍からではなく、あくまでそのチャプレンが属している宗教団体に由来するものとされている。チャプレンとチャプレン・アシスタントには、軍人としての高潔な人格が期待されている。従軍チャプレンという存在の特殊性は、聖職者でありながら同時に将校でもあるという点にあるわけだが、彼らは自らを「司令部の良心」とも称しており、そうした役割認識をもって信仰の問題、軍事作戦の倫理的問題、兵士たちのQOLの問題などに幅広く取り組むのだとしている。またチャプレン部隊のモットーとして、「兵士に神を、神に兵士を」という言葉が挙げられている(Field Manual 1-05)。これはあくまで「非公式」なモットーである、とただし書きが添えられているが、一応これも従軍チャプレンの位置づけを表現したものだといえるだろう。陸軍公式ウェブサイトには約10名のチャプレンの自己紹介が掲載されており、それらを見ていくと、彼らが「国家」と「信仰」という二つを軸に、崇高な使命感をもってその任務に取り組んでいるのがわかる。

アメリカ軍には従軍チャプレン(伝統的宗教)とは別に、広い意味で宗教的だといえる営みがある。それが「軍葬」である。「陸軍規則(Army Regulation 600-25)などでは、軍葬は次のように定義されている。すなわち、「戦時もしくは平時にわれわれの国家の防衛に献身した者に対する敬意の儀礼的表明、および国家としての感謝の気持ちの最後の実演」である。陸海軍のマニュアル等によれば、軍葬の主な要素としては「国旗の折りたたみと授与」「タップス」(葬送ラップ演奏)「弔銃射撃」が挙げられるが、他にも「ミッシングマン・フォーメーション」という追悼飛行などもしばしばなされる。

またアーリントン墓地の無名戦士の墓の前では、陸軍第三歩兵連隊の衛兵が、365日24時間の警備をおこなっている。礼装でライフルを担ぎ21歩で墓の前を往復する動作を繰り返しており、これは国家や軍あるいは愛国心を象徴する儀礼となっている。

以上のようなチャプレン制度および軍葬については、もっぱら実証的な研究であった。これら別に、旧日本軍の特攻隊員が書き残した宗教的死生観に関する日記・遺書・エッセーなどに関する思想的事柄についての研究

においては、具体的には二名の人物をとりあげた。一人は戦闘機パイロットとして、いわゆる神風特攻隊員として出撃、戦死したクリスチャンの林市造、もう一人は戦艦大和の沖縄特攻に参加し、奇跡的に生還を果たして戦後キリスト教徒となった吉田満である。

林市造が残した日記と書簡は『日なり 楯なり』という本にまとめられている。他の戦没学徒遺稿集にも彼の書簡が収録されているが、テキストを比較すると、『きえわだつみのこえ』や『あゝ同期の桜』などには、明確な断りのない文章の省略や書き写し間違いなどがあるのが確認できる。林はクリスチャンの母子家庭のなかで育ち、良い友人にも恵まれていた。彼が軍隊生活の中で書き送った書簡をみると、母親との結びつきがいかに強いものであったかがよくわかる。信仰的な話題について触れる際には、その背後にはっきりと母への思いというものがあった。母への愛情とキリスト教信仰は、特攻隊員となってから出撃までの約一ヵ月半のあいだ、彼の中ではいつも同一の地平にあったのである。特攻死を前にして書かれた日記や書簡における信仰的な表現や聖書への言及は、当然林自身の信仰を示しているものだが、同時に、母や姉への究極的な愛情を表すレトリックでもあったとも解釈できる。

吉田満も林市造と同じく大学在学中に学徒出陣で軍に入った。吉田は最終的には副電測士として戦艦大和に乗り込み、沖縄への海上特攻隊として出撃することになる。乗組員の約9割が戦死という壮絶な戦闘であったが、吉田は奇跡的に生還を果たし、戦後すぐに小説『戦艦大和ノ最期』を発表する。吉田はその読者の一人であった神父の影響からカトリックに入信、後にプロテスタントに改宗し、戦後生活のほぼ全てをキリスト教徒として送った。吉田はその後も日本銀行に勤めるかたわらで「戦争」や「平和」に関する多くのエッセーを執筆するが、それらの背後には明らかに「信仰」の問題が横たわっており、むしろ宗教的省察という側面を抜きに彼の平和論や特攻体験の回想を理解することはできないといつてよい。吉田はキリスト教徒として平和を訴えながら、しかし同時に特攻体験者として戦争の現実や日本という国家を見つめ続けた。吉田の思索からは、安易な平和主義への警戒と現実的平和への信念、そしてそれらを裏づけ支える宗教的次元の重要性を読み取るべきであるように思われる。

以上のように本研究では、一方ではアメリカ軍の従軍チャプレン制度や軍葬を扱って、「宗教」と「戦争・軍隊」について実証的レベルでの研究をおこない、これまで整理されてこなかった情報をまとめた。また同時に他方では、林市造と吉田満の日記、手紙、エッセーなどをとおして、人間個々人の実存的レ

ベルにおける「宗教」と「戦争・軍隊」との関わりについて考察をおこなった。「宗教」という営みは戦争に対して単純に批判的でも肯定的なのでもない。戦争とはいってもなく巨大な悲劇であるが、冷静な視点でそれらを分析していくには、戦史家J・キーガンがいうように「文化の発露」として戦争を捉える見方も必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

①石川明人「戦艦大和からキリスト教へ ― 吉田満における信仰と平和―」(北海道大学文学研究科編『文学研究科紀要』第127号、2009年、41-79頁) 査読無

②石川明人「アメリカ陸軍チャプレン科 ― 軍隊における宗教サポート―」(北海道大学文学研究科編『文学研究科紀要』第124号、2008年、1-23頁) 査読無

③石川明人「クリスチャンの特攻隊員 ― 林市造の手記を読む―」(北海道大学文学研究科編『文学研究科紀要』第122号、2007年、1-35頁) 査読無

[学会発表] (計 3件)

①石川明人「軍隊における宗教と宗教性」(2008年9月14日、日本宗教学会、筑波大学、茨城県つくば市)

②石川明人「米陸軍における従軍チャプレンの位置づけ」(2006年9月21日、日本基督教学会、上智大学、東京都千代田区)

③石川明人「軍葬 ― 現代アメリカ軍における死者の追悼―」(2006年9月18日、日本宗教学会、東北大学、宮城県仙台市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 明人 (ISHIKAWA AKITO)
北海道大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：90360875

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし